

平成30年度 奈良市立東登美ヶ丘こども園 研究実践概要

園長名 西谷 慶子
全園児数 84名

1. 研究主題

「豊かな心をもち 主体的に生活する幼児を育成する」
—身近な環境（ひと・こと・もの）とのかかわりを通して—

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

幼児が初めての集団生活を経験する中で、様々なひと・こと・ものに関わりを通して、豊かな心を育て生活する基盤をつくっていくことが大切と考える。幼児が主体的に生活をしていくよう保育者の援助・環境構成を探っていきたいと考え主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

様々なひと・こと・ものに関わりを通して、感動体験を積み重ねることで豊かな心を育むことができる保育内容・援助や環境のあり方を考える。

②研究の重点

- ・豊かな心をもち、主体的に生活をするためには、保育者がどのように援助及び環境構成を行っていくかを探る。
- ・幼児期の特性や発達段階を踏まえ、一人一人の幼児が豊かな経験ができるように保育内容の工夫に努める。

③活動の方法

<お山をつくろう> 3歳児 6月 援助・環境構成

3、4人の幼児が砂場でバケツや鍋、椀などで水を勢いよく何度も流したり、裸足になってパシャパシャと足や手をつけたりしながら、その感触も味わいダイナミックに遊ぶことを楽しんでいる。「お山つくろう」「大きいお山にしよう」と、砂や泥で山をつくる。保育者も幼児の思いを受け止め一緒につくる。山ができると、今度は「穴を掘りたい」と言う。「よし、掘ってみようか」と思いを受け止め、一緒に遊ぶまわりの幼児に「穴掘りたいんだって」と、思いを伝えたり「どうやって掘るの」と問いかけたりして、一緒に掘る。山が壊れてしまうと「ああああ、壊れちゃった」と言う。残念な気持ちを受け止め、「どうしようか」幼児に問いかけると「もう1回つくる」「先生しよう」とまた、つくり始める。何度か壊れても「修理、修理」と繰り返し、つくり直す姿がある。トンネルが繋がるとニコッと嬉しそうに笑い、それを見た他の幼児も「僕もしたい」「私も」と手が触れることを喜ぶ。



(反省・評価)

- ・3歳児は、保育者との関わりの中で、安心して生活し遊ぶ楽しさを感じていく時期である。その中で友達との関わりや一緒に遊ぶ楽しさを感じるように言葉を添えたり、知らせたりしてきた。
- ・保育者が一緒に遊び、楽しむことで子ども同士のつながりが広がり、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを共有し、3歳児なりに考えたり試したりしながら夢中になって遊ぶ姿につながっていったと考える。

<パラバルーンをつくろう> 5歳児 10月

運動会の後、5歳児がパラバルーンで遊んでいると、3歳児や4歳児も遊びに参加してきた。大きなパラバルーンのためうまく膨らまず3、4歳児が重そうにしている。どうしたら年下の友達が、パラバルーンが膨らんだり持てたりするのかをクラス全体で考えた。「大きすぎるから少し小さく」「重いから軽く」という意見を取り入れ、手づくりのパラバルーンをつくることになった。布・ビニール・布団・大きな紙などでつくろうということになり、幼児と一緒に材料を探しに行き、みんなでどの素材がよいか試してみる。膨らませてみたり引っ張ってみたりと試していくと、パラバルーンに近い膨らみ方であることや、パラバルーンを揺らすと優しい風が来るということに気づき、ビニールで作り始める。ビニール袋をみんなが使いやすい大きさにつなぎ合わせる時「僕がここを持っているからセロテープをつけてね」「私はまっすぐになるようにビニールを引っ張っておくよ」「オッケー」と、役割を決め協力してつくった。パラバルーンが完成すると、みんなでパラバルーンを膨らませたり揺らしたりしながら「すごいきれい」「軽いから持ちやすいね」「中からも外がよくわかるから3歳さんや4歳さんも喜ぶね」と、嬉しそうに友達と話す。



(反省・評価)

- ・年下の友達も楽しく遊べるためにはどうしたらいいだろうということから、パラバルーンづくりが始まった。クラス全体で話し合いの時間を十分にもったことで、意見を出し合いながら、どうすればみんなが楽しく遊べるのかを考えられた。
- ・様々な素材を準備しておくことで、素材の特性にも気づき遊びに合ったものを試しながら選ぶことができた。また、子どもたちが考えたことで、友達と協力してつくり上げる姿に繋がった。
- ・5歳児にとっての援助は、見守ったりヒントとなる助言を行ったりすることで、遊びを自分達の手で進めていくことができると再確認した。

<ドングリころころ> 3歳児 11月頃

幼児たちと隣接する小学校の校庭へドングリを拾いに行き、たくさんのドングリを見つけて喜ぶ。保育室に戻り、集めたすべてのドングリをタライに入れ、友達と一緒にかき混ぜたり触ったりして音や感触を楽しんでいる。「コロコロ」「ジャラジャラ」など、自分なりに音を声に出している。また、保育室でカップに入れて持ち歩いたり、保育者が準備した段ボールの上を転がしたりしている幼児もいる。

まっすぐ転がらず横へ転がり落ちたり、どこまでも転がったりする様子を見て「ちゃんと転がらへん」「どっか行ってしまう」など、困った様子が見られる。

翌日、転がる楽しさを味わってほしいと思い、箱型になった大きな段ボールを準備し、段ボールの下に台を置き、傾斜をつけておく。(箱型で横に壁があるのでまっすぐ転がる)

「わあ、滑り台みたい」と、うれしそうに見つける。一つずつドングリを転がす幼児や、カップに入っているドングリを全部転がす幼児など様々な姿があり、コロコロと転がることを喜び、何度も何度も繰り返し転がすことを楽しむ。そばに準備しておいた筒も見つけると、その筒の中にドングリを入れて出てくることを楽しむ姿も見られる。



転がすことが楽しかったようで、毎日繰り返し遊ぶうちに、友達と一緒に段ボールや台などを運んで自分たちで遊びの準備や片付けをしようとする姿が見られるようになった。

(反省・評価)

- ・ドングリという身近な秋の自然物に触れて遊ぶ中で、音や感触を自分なりの言葉で表現しようとする姿が見られた。
- ・最初は平らな段ボールの上を転がすことを楽しんだが、まっすぐに転がらないことや、どこまでも転がって行ってしまふことに気づき、困ったことを保育者に言葉で伝えられたことで、遊びが発展する機会となった。また、四方を囲まれた箱型の段ボールを準備し傾斜をつけて置いたことで、何度も繰り返し転がし遊びを楽しむことができた。十分に遊びを楽しむ中で、準備物や場所などの見通しをもつようになり、自分たちで準備や片付けをしようという気持ちが生まれたのではないかと考えられる。

<ピタゴラスイッチみたい> 4歳児・11月

数人の幼児が段ボールを切り開いたりつなげたりして、ドングリを転がして遊んでいる。一人の幼児がヨーグルトの容器を置き「ここにドングリ入るかな。」と、試し始める。周りにいる幼児も一緒に試し始め、誰が一番容器にドングリが入るか競うゲームが始まった。あとから遊びに来た幼児が「ピタゴラスイッチみたい」とつぶやく。ドングリ転がしをしていた幼児達は、容器に入るごとに『♪ピタゴラスイッチ』と言い、ピタゴラスイッチを思い描きながら「ここから、こう行ってな、ここに行くねん。」とドングリの転がる様子をイメージし、友達に伝える。



「もっとコースをつくろう」「ぼくはピタゴラスイッチの看板をつくる」「わたしはガムテープ屋さんになる」と一人一人が自分なりに役割を考え、必要なものを探し用意を始めた。コースが完成すると、一つずつドングリを転がすがなかなか入らない。「たくさんドングリを流してみよう」と、箱にあったドングリを一度に転がすと「たくさん流したら、いい音がする」と喜ぶ。保育者が缶のフタを用意すると、友達とどこに置いたらもっといい音がするかコースを見ながら考え、話し合う姿が見られた。

(反省・評価)

- ・一人が言った「ピタゴラスイッチ」という馴染みのあるワードから、その言葉を聞いた幼児達のイメージが膨らみ、コースをつくったり、ゴールはどうするかを考えたりしながら役割分担ができていった。
- ・幼児の遊びを見守り、じっくりと時間を取ることで自分なりの考えを出し友達と関りを深めることができた。また、缶のフタを出したことで、友達同士で考え、創意工夫することに繋がっていった。

5. 研究の成果

本来なら、3歳児は言葉のシャワーと言われる程多く声をかけることで、言葉を獲得し動作に繋がる。また、4歳児は3歳児からの1年間の経験があり、ポイントとなる点で声かけを行うことで、育ちがみられる。しかし、今年度の3歳児4歳児は入園時が同じであるため1年間の保育経験がない4歳児である。

同じ題材での援助（声のかけ方・ヒントの出し方など）は年齢に応じて行うが、クラスの実態を踏まえ、育つ時期に必要な物は何かを把握し、援助を行ったことで、3歳児なりの遊びの発展と4歳児なりの遊びの展開へと繋がっていった。

上記のことも踏まえ幼児の生活は、遊びそのものであると言っても過言ではない。いろいろな遊びを通して、様々なひとやこと、身近な環境（もの）との関わりを意図的に計画的に積み重ねることで、幼児自ら興味や関心をもって主体的に関わる姿に繋がると考える。

6. 今後の課題

- ・今後も様々な感動体験ができるよう、内容を検討し他の他児が主体的に活動できるような環境の工夫や援助の在り方を更に探していきたい。
- ・教育課程を見直し、保育内容を創意工夫し発達に応じた指導計画を今後も取り組んでいきたい。